みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

手塚治虫とロボット

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4606

巻頭言 NO.116

手塚治虫とロボット

国立民族学博物館
文化資源研究センター
教授 久保 正敏

1980年代初頭、工場に導入され始めた産業用ロボットに対し、日本では現場従業員が各ロボットに愛称を付けたという。アームを持つ機械に過ぎぬ産業用ロボットを人格化したのは、欧米では考えられないことだろう。

そう言えば、『2001年宇宙の旅』から『マトリックス』に至るまで、ハリウッド系映画にはAI(人工知能)を人間に敵対する存在として描くものが多いようだ。彼我の違いには、人間とそれ以外を峻別する西欧的思考と、人間も世界の一部と見なす東洋的思考との相違があるからかも知れないが、それ以上に、日本には「鉄腕アトム」の存在があったからではないだろうか。

そのデビューは1951年から『少年』に連載された「アトム大使」、地球への移住を求める宇宙人と地球人の争いの調停役を、そのどちらでもないアトムが担う話。進駐軍とのコミュニケーション・ギャップを体験した手塚が、異文化との共生の可能性を探った作品と言える。

異者との接触と対立、それを越えた共生は可能か、という問いは、SF、サスペンス、少女モノ、青年モノなど様々なジャンルを問わず、手塚作品に共通するテーマの一つだ、と私は考えているが、対立項を調停できるのは第三の存在かも知れぬという手塚の示唆が、既にアトム第一作で示されている。当初は機械然としていたアトム大使に人気が出て、あらためて心を持つ少年アトムを主人公とする作品群が68年まで『少年』に書き続けられ、手塚の代表作の一つとなった。

それは、戦争と平和、善と悪、理想と現実、科学と呪術、文明と未開、希望と挫折など多くの対立項を含んだ壮大な物語だが、アトムは、これら対立項に立ち向かいながら、悩み、怒り、悲しむ。少年の代役として作られたが捨てられ、怪物のような能力を持つ自分は何なのか、と自身もアイデンティティ・クライシスに悩み、遂には人間とも対立するアトムに、私たち読者は驚くとともに、単なる正義の味方ではないアトムの弱さに惹かれ、人間たちと口ボットたちそれぞれの悲しみに涙する。と同時に私たちは、多くの対立項がからみあった複雑な世界で、対立する二項のどちらかに与することの切なさ・虚しさを知り、相対化の視点が共生のヒントではないか、と気付いたと思う。

さらに言えば、連載当初の科学信仰と未来志向は、長い連載期間中に色あせ、核開発競争や公害など科学技術への批判が高まった60年代の「異議申し立て」を反映して、物語やアトムの立ち位置も変化していく中で、科学技術を相対化する視点にも、読者は目を開かれたに違いない。

日本のロボット工学を切り開いてきた研究者や技術者の方々のほとんどが「鉄腕アトム」を目標にしてきた、と語るのを聞くとき、多文化共生社会における口ボットを構想できるのは、彼らアトムの申し子をおいてないのでは、と私は思っている。

くぼ　まさとし

1949年兵庫県生まれ。1974年京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了、工学博士。京都大学工学部助手を経て1983年国立民族学博物館助手、1990年京都大学大型計算機センター助教授、1993年国立民族学博物館助教授、1998年教授。民族情報学専攻。
編著書に『研究情報ネットワーク論』『コンピュータ・ドリーミング　オーストラリア・アボリジニ世界への旅』『マルチメディア時代の起点　イメージからみるメディア』『田中千代コレクション――世界の民族服と日本の洋装100年』など。